

図書館の原風景

ふくい りか
福井 里佳

(看護医療学部准教授)

私が看護教員になったのは1996年。今年で20年になる。日頃、看護の教育研究の場にいると、医療の新しい知識や技術を知ろうと、また自分自身の研究疑問を明確にするために先行研究を検索したりと、古いものよりも新しい研究知見や改訂版の文献を探して手に取る機会が多い。その意味で、図書や雑誌、研究論文の電子化や検索のリソースが充実している図書館のシステムは大変有難い。この20年の間に、図書館の設備やサービスの変化、活用のしかたの変化をあらためて感じている。先日は、所属キャンパスの司書の方が、実習のまとめの発表会に参加してください。実践的な学習として演習や実習科目の多い看護系の学部を擁する図書館を利用する学生や教員のニーズを把握し、図書の展示や蔵書を検討して下さることも大変有難く感じている。

一方で、電子ブックにまだ馴染んでいない私にとって、図書館の原風景は、学生時代の図書館にある。静かでやや薄暗い高校時代の木造の図書館を思い出すと、館内の古い蔵書のおいまで記憶に蘇ってくる。中学、高校の頃、本を読み出すと、宿題も時間も忘れるくらい読みふけた。今考えると、本当に贅沢な時間であった。自分が読んだ本、友人お薦めの本、教師が紹介してくれた本、そしてあこがれの先輩が読んでいた本について、友人達と話すことも楽しかった。それを通して、私は様々な出来事や文化、物事の見方に触れ、それに対して共感したり、ドキドキしたり、時に違和感を感じたり、しばらく余韻を楽しむようにストーリーを味わい直していた。推理小説、伝記、古典、赤毛のアン等々の物語や反戦の童話集、ノンフィクション、闘病記、小説。とりとめのない濫読状態であったが、本を通して本当に様々な体験をした人や、いろいろな考え方や価値観をもつ人に会ったように思う。

そして大学、院生時代に通った図書館の書庫には、看護や教育の諸先輩が手に取ったであろう看護学の文献や、今では絶版となり色褪せた教育学理論の書物や実践研究の文献が並んでいた。慌ただしい毎日のなかで、書庫に入るつかの間の時間は別世界であった。特に、当時関心のあった戦後教育の大きな転換期に教師達が

残した自由で生き生きした教育実践記録は、小児病棟の一看護師であった私には大きな衝撃だった。

年を経るにつれて、時間を気にせず本をじっくり読むことが少なくなりました。しかし、私にとって図書館は、手に取った本の重みや、紙の感触やにおい、目に飛び込んでくる字体といった五感の体験とともに、図書館という公的空間のなかで自由に本を選び、その一角を自分の場所として身を置き、ページをめくっていく、公と私の間の不思議な空間と時間のなかで過ごす体験でもあった。時に、図書館での緊張感とリラックス感の入り交じった感覚は、自分の内と外との不思議な緊張関係となって、図書を介して著者がリアルに語りかけてくるような心地よい集中が生まれていた。そして、図書館を出ると、再び日常の生活や学習、仕事に戻っていく。

しばしば教育において、社会や集団、グループのなかで他者との関わりを通して学ぶという側面が強調されがちである。しかし、一人になった時に経験をふり返ったり、図書やメディアとの出会いを通して自己と対峙することも人を成長させてくれる重要な機会である。Bouldingは『子どもが孤独(ひとり)でいる時間(とき)』において、人が成長するうえで一人でいることの肯定的な意味について述べている。そこでは、いったん現実の生活と少し距離を置き、未知の世界と出会ったり、経験との再統合や自分自身の再吟味、そして創造的な思考活動が行われるというのである。

通信技術の進歩やメディアが多様化するなか、今の学生の図書館の活用のしかたは個人、グループ学習と目的に応じて様々であろう。しかし、図書館という場において、未知の知識や文化、事実や物語に思考や感情を巡らしながら、人間としても専門職としても豊かに成長する入口となるような空間と時間をこれからも提供して欲しいと思う。

文献

Elise Boulding (1962/1988). 子どもが孤独(ひとり)でいる時間(とき) (松岡享子訳). こぐま社.